

## 真実の礎 9 話

編集者まえがき

今回は「真実の礎」17.5 話「落ちぶれゆく者と薬の行方」、『真実の礎』第十八話：パタリロ来日(Neutralizer)を中心に再編集を行いました。第十七話：『怒』その一、第 18.5 話：関東連合議会内の暗闘についても同様に加えています。

PDF ファイル化したことでアップデートしやすくなりました。

1

「ウーイ、チクショーツ!!おい親分、酒だ酒!!酒出してくれ!!」

「おい、いい加減にしろ!!飲みすぎだぞ!!」

ここはおでん屋『たこ助』。この店にオボロゲクラブを追い出されたサタクラがやけ酒を飲んでいて。この店の主、橋場健二(通称：橋健または親分)が酔っ払った彼を叱り付ける。

「うるせえよ!!親分、金はあるんだからよ～さっさと出してくれよ～」

「馬鹿野郎!!今のテメエに出す酒などあるか!!やけっぱちで飲みやがって」

「これが飲まずにいられるかってんだ!どいつもこいつも人の事情も知らねーで…」

「ああ、そうかいそうかい。だったら一ついい事教えてやる、よ～く聞きやがれ」

と橋場はサタクラが来る前の事を話し始めた。

「?いい事って何だよ、親分」

「テメエが来る前にな、おぼろさんが来たんだよ。二人の連れと共に」

「…で?」

「おぼろさん泣いてたぞ。何かをやらされてそれが失敗した事で相手から散々いびられたとな」

「ヘッ、な～んだそんな事かよ。そりゃそうだろうよ、そのヘマを相手に告げ口したのはこの俺だからな。ハハハハハハ…」

「いいから黙って聞け!それからテメエがさっき言ってた事も知ってたらしくな、テメエを責める事なくただただ自分達の不幸を嘆いてたぞ。やさしい人じゃねえか」

「はあ、ホントどこまでもお人よしだねえ…親分さんよ、そういう人間を『馬鹿』っていうんだよ。俺みたいにな何にも採算が合わないところはさっさと見切りをつけて切り替えるのが利口なんだよ。あんなちっぽけな探偵社やってたって人が来ねえのによ、あそこの奴等は馬鹿だ、アホだ、いや原始人並みの脳みそしか持ってねえのさ。ハハハハハハハ」

サタクラの暴言に怒った橋場はおでん鍋に入れてあったおたまを手に取り、持ち上げるとその中に入っていたおでんのだし汁を勢いよく彼の顔にかけた。

バシヤ!!

「アッチィ!!何しやがるんだよ!?!」

「テメエはどこまで大馬鹿野郎だ!!おぼろさんはなあ!テメエの事をまだ仲間だと思ってやがるんだ!!そんな人に唾を吐きかけるような事を言いやがって!そこまで性根が腐ったか!!」

「おうおう、だったら叩き直すってか!?さっさとやりやがれ!!煮るなり焼くなり好きにしろ!!」

と二人が言い争っているところに

「おう、やっぱりここか。おい、金はできたのか?」

といかにも人相の悪い男が店に入ってきた。

「おう、これはこれはサンダーさんじゃありませんか」

「ご挨拶だな。ほう、なんか酔っ払ってるな、て事はあるんだな。さっさと出してもらおうか」

と『サンダー』と呼ばれた男はサタクラに金を催促する。この男、ハラハラ金融という会社で働いており、その実態は闇金融である。

「おう、ここによホラ!あるぜ。とっとと持ってけドロボー!!」

とサタクラは懐から金の入った袋を取り出し、カウンターに置くとその袋をカーリングストーンのように滑らせてサンダーに渡す。

「…ほう、結構入っているではないか。これでも足りんがまあいいか。それにしても無様だな」

「ヘッ、俺様は所詮犬だからな。無様だろうが性根が腐ってるって言われようが関係ねえのさ」

「ふん、分かっているではないか。だったら残りの金を今すぐにでも都合をつけてもらおうか?確かあと300万だったな」

「うるせえな、今そんな気分じゃねえんだよ。都合はつけるからよ、今日はさっきの金で勘弁してくれよ」

「お前、確かさっき自分の事を『犬』だと言ったな。人に従順であるはずの犬が盾突くのか!?面白い、だったら内

臓でも取り出させてもらおうか。それでチャラにしてやる」

「ま、待ってくれよ、いくらなんでもそりゃねえだろ。頼むからさあ、ホントに今の分で勘弁してくれよ」

サタラクラは手を合わせてサンダーに懇願する、が

「フン、俺は金を借りている人間を信用はしない主義でね。それに今『煮るなり焼くなり好きにしろ』と言ったのは誰だったかな?だからその通りにしてやるのさ」

「だ、だから…あれは…」

「ほう、今更取り消しは出来んぞ。さあ、俺と共に来てもらおうか。望みどおり俺が料理してやる、借金を完全に返すまでな」

とサンダーは顔が青ざめているサタラクラの襟首を掴み、外へ連れ出そうとする。サタラクラも

「ま、待ってくれよ〜!サンダーの旦那」

と抵抗するがサンダーは強引に引っ張って行こうとする。がその時

「おい!!!待ちやがれ!!!」

と橋場が包丁をまな板に突き立てて、ドスの聞いた声で叫んだ。

「おい、そこのお前!!」

「俺の事かな?」

「当たり前だ!他に誰がいる!?嫌がってるじゃねえか、そこまでにしやがれ!!!」

「おいおい、これは俺とこいつとの話だ。アンタは引っ込んでもらおうか」

「うるせえ!!ここは俺の店だ!!それにそいつはこの店の客だぞ、客に手を出すなら俺も許さん!!とっとと出て行きやがれ!!!」

「フン、だがこいつは同時に俺の客でもある。それでも邪魔するというなら営業妨害として訴えるがそれでもいいのか?」

「それはこっちのセリフだ!お前とて立派な営業妨害してるじゃねえか!!今ここでな!さあ、とっとと出て行け!!!」

「あーもう、うるせえーツ!!!」

サタラクラが橋場とサンダーの言い合いに耐えられなくなって叫んだ。

「ったくどいつもこいつも俺の事で勝手にゴチャゴチャ言いやがって…おい親分、お勘定だ、お勘定」

「おい、お前…」

「うるせえ!もう放っといってくれよ。とにかくサンダーさんよ、残りはきちっと返すからよ、都合つけるまで待ってくれ。頼むよ、な」

と彼が再びサンダーに懇願すると

「フン、今日は店の主に免じてこれだけで勘弁してやる。ついでだ、お前の飲み代も払ってやる。お前の借金の一部として追加させてもらうがな」

とサンダーはサタラクラから受け取った袋から一万円札を二枚出し

「済まなかったな、詫びとして釣りは取っておいてくれ」

とカウンターに置いて店を出て行った。

「…さて、俺も退散するとすつか。じゃあな、親分」

「おい、待て」

「うるせえな!放っといってくれって言っただろ」

とサタラクラは橋場が止めるのも振り切って店を出て行った。その後ろ姿を見送った橋場は店の電話を取る。

「…おう、岩切か。お前、『オボロゲクラブ』ってどこ知ってるな。実はな、そのメンバーのサタラクラって奴がさっき来て飲んでいたんだ」

『はは一ん、分かりましたよ親分。そいつの足取りを追って事ですわね』

相手の『岩切』という人物が電話越しに答える。

「さすがだな、そうだ。そいつ借金があるらしくてな、今さっきも借金取りが俺の店にまで来てそいつに催促してたんだ」

『成程、それで親分気になって俺に電話してきたんすね。分かりました、そいつがどこで借りているかも調べますよ、ついでに兄貴達にも親分が仰っていた事伝えましょうか?』

「おう、そうしてくれ。他の奴等にもサタラクラって奴の足取りを追わせろ、頼むぞ」

『了解しました、親分。任せて下さい』

橋場は電話を切る。実はこの男『親分』という通称があるとおり浅草でヤクザの親分をしていたのだが妻を亡くした事がきっかけで組を解散し、カタギとなっておでん屋をやるようになった。しかし、元子分達の就職活動が思わしくなかった為、たまたま来たある客に相談したところ、『探偵業をやってみたら?』というアドバイスを受けて探偵業もやっているのだった。因みにそのアドバイスをしたのがあの永井仁清である。

「さて…あの男、何かまずい事に首をつっこまなければいいが…」

と橋場は呟く、が彼の呟いた予感は最悪の形で的中してしまうのである…。

一方、店を出たサタラクラは…

「あ、すみません。そこの方」

と歩いてる途中で一人の男に声を掛けられた。

「俺か？俺に何の用だ？」

「貴方、桜宗吾さんですね？」

「ああ、そうだけど」

「いやあ、探しましたよ。オボロゲクラブにいないと聞いたもんですから」

とその男は言う。尚、『桜宗吾』というのはサタラクラの本名である。

「へっ、もうあそ事は関係ねえんだよ。で、用件は何だよ？」

「私は竹内という者ですが貴方の事は新時代出版社の三島編集長からお聞きしましたよ」

「…で？」

「それでですねえ、貴方相当な借金抱えていると聞きましてね。貴方を助けて欲しいとその編集長から頼まれたんですよ」

「あの編集長が？」

「そうなんです。実は私の兄貴分である男が貴方に貸し付けている金融会社の社長とは昵懇の仲でして、もし私達の仕事を手伝ってくれたなら貴方の借金を棒引きさせる口ぞえをさせていただきますが」

「な…本当か？」

「ええ、我々の仕事を手伝ってくれるならばの話ですが…」

「……」

サタラクラは迷っている。こんなうまい話はない、しかしうまい話に裏があるという事ぐらい彼も分かっているからだ。しかし『竹内』と名乗る男はその迷いを掻い潜るように

「おやおや、迷っておりますね。まあ、返事は今すぐでなくてもいいですよ。尤も貴方に帰る場所があればの話ですがねえ」

とサタラクラの現状をえぐるように言った。

「…本当に手伝えば棒引きしてくれるんだな？」

「ええ、本当ですよ。よかったら私の兄貴に会いませんか？詳しい話は兄貴から訊くといいでしょう」

「…分かった、連れてってくれ。その兄貴の所に」

「いやあ、よかったよかった。じゃ行きましょうか」

サタラクラはついに竹内の話に乗る事にした。しかし、やはりうまい話には裏があるもので彼は後に最悪の選択をしたと気付いた時は手遅れだったと思い知る事になるのである…。

数日後…

ここはゼーラ帝国内鳥取市から山間部に向かって車で約一時間ほど離れた所にある CP9 製薬ゼーラ開発研究所、ここにあのブルーノが訪れていた。彼は研究所内を当研究所所長であるガジャと施設内を回りながら新薬の事で話し合っていた。

「ガジャ博士、新薬の方はどうなっている？」

とブルーノが尋ねると

「ああ、『ゴーレム』の事かね？まだ調整中だ」

とガジャはかすれたような声で答える。

「おいおい、あれだけの成果を挙げながらまだ調整中とはどういう事かね？製品化してもおかしくはないぞ」

「部長さん、アンタは薬の副作用というものが分かっておらんようだな。あれだけの効果だからこそ、その分の副作用もあるという事だ」

そう、ガジャの研究していた薬『ゴーレム』は CP9 が買収したアメリカの医薬ベンチャーの持っていた資料を基本に完全体として開発しようとしていた対ウイルス抗生物質だった。だが、ガジャは副作用を懸念して実際の実験治療を控えていた。その副作用とは動悸・眩暈・発疹であるが最悪の場合、心肺機能が破壊され死亡するというものだった。無論ガジャはその事をスパンダムが来る度に報告したのだが聞き入れた様子はなかったのである。

そして今日来たブルーノもスパンダムと同じ態度をとりながら催促する。

「何を言う博士、そんなものは後でどうにかすればいいという事だ。直ちにデータを社長に提出してもらおうか」

「断る!!アンタや社長のように利益一辺倒しか考えぬ者に『ゴーレム』のデータなど渡さぬぞ!!それに薬というも

のは漢字で書くとおりに草でもって楽になる物、即ち人々が病から解放されて楽に生きられる物としてあるべきだ。それが分からぬお前達に『ゴーレム』を商品化する資格なぞない!!」

「何っ!?博士こそここがどこでアンタが誰に雇われているか分かっていないようだな。第一アンタの研究資金を誰が出していると思ってるんだ!データを寄越せ!さもなくば…」

とブルーノが脅すがガジャはそんな脅しに屈せず、ケロリとした表情で

「ハハハハハハ…このわしを解雇するのかね?それとも消すのかね?無駄だ、あれはわしの手元にあるがわしで見られぬようにしてある。どこにあるとも言えんな、まあハッキングでも何でもやってみるがよいわ。尤もそんな事してもパソコン上に記録してあるならばその時はウィルスが作動してデータを消すようにしてあるし、紙に書いてあるかディスクかメモリーに記録してあるならばそれを保管してある場所はわしが死ねば開けられぬうえにこれもまたデータを消す工夫もしてある、それでもやるならご自由にやってくれたまえ。ではわしは失礼するが社長に伝えておいてくれたまえ、『ゴーレム』を販売したければわしのOKサインが出るまで気長に待つ事だな、と」

と不敵に笑いながら自分の仕事に戻っていった。後に残ったブルーノは怒りで顔が歪み歯を食いしばって体をブルブル震わせながら言った。

「おのれ一っ!!!ガジャめ、そこまで手を打っているとは一っ!!!」

「何一っ!!ガジャがそんな事を言っていた一っ!?!」

CP9 製薬ゼーラ本社社長室でブルーノから電話を受けたスパンダムは激怒し、片手で受話器を持ったままもう片方の手を拳にして机をドンと叩いた。

「はい、申し訳ありません社長。奴め、我々がこうする事をあらかじめ知っていて奴しかデータを見られないようにしてあるとも言っていました」

「あの野郎!!俺と親父が資金を出してやっている事すら関係ないとも言うのか!!よし、奴が親父の恩を仇で返すというなら俺にも考えがあるぞ。ブルーノ!お前は本社に戻って俺の所に来い!!」

「はい、分かりました」

受話器を置いたスパンダムは椅子から立ち上がり、部屋中をグルグル回りながら考え独り言を言う。

「くそっ!!どうしたものか…。アイツしか見られなくなると強行すれば全て水の泡だ。だがあの『ゴーレム』ならば我が社は更に飛躍する、株取引の約束も喪黒社長達と交わしたというのに…」

丁度そこへ

「失礼します、社長コーヒーを入れましたのでお召し上がり下さい」

と社長秘書のカリファがコーヒーを入れたカップをお盆に乗せて持ってきた。

「おお、ありがとよ」

とスパンダムはカップを手取る、が

ビシャ!!

ガッシャーン!!

「ウワチャチャチャチャ!!チクショーツ!!零しちゃった!!」

彼は手が滑ってコーヒーを自分の手と服にかけてしまいカップを割ってしまった。

「社長」

「ああ大丈夫だ、くそっ!!染みになっちまうじゃねえか!」

と彼はティッシュで服と手を拭きながら顔を上げるとカリファと目が合う。その時、

「!…フツ、フフフフフ…ハハハハハハ…ダーツハツハツハツハツハ…」

と何かを思いついたのか突然彼は笑い出した。

「社長」

「あ、何だ?」

「それ、セクハラです」

「ウオイ!!そこでそれを言うか!!まあいい、お前を見ていい事を思いついた、というよりこの俺ともあろう者がすっかりあいつ等の事を忘れていたぜ!俺様には切り札があった事をな!カリファ!!」

「はい」

「お前が以前話していた探偵業をしているあの小娘共がいるだろう、その小娘共を俺の所に呼べ!!ああ、ついでに、開発研究所の主任の名は何と言ったっけ?」

「氷室巖ですか?」

「そうだ、そいつとルッチもだ。後ブルーノもこっちに呼びつけてあるからな、今すぐに連絡を取れ!」

「はい、かしこまりました」

カリファは携帯を取り出すとスパンダムが言った探偵事務所に連絡を取る。

「もしもし、私 CP9 製薬社長秘書をしているカリファと申します。社長が仕事のご依頼をされたいそうですので

…。ええ、今すぐにでもお願いします…」

数十分後…

「何だ、あの子達は？」

「さあ…」

すれ違いながら囁き合っている社員達をよそに四人の少女達が社長室に向かって歩いていった。その内の二人は無表情である。

「おい、何だありゃあ？」

「さあ、一体何者なんでしょうかね？ウソップさん」

たまたまトイレから出てきたコビーとウソップもすれ違った四人を見て首を傾げる。そこへ

「おいお前等、早く戻ろうぜ！また親父のいびりに遭うぞ！」

とヘルメツポが二人を呼ぶ。

「あっいっけね！そうだった」

「あの人、何もしていないだけでも怒鳴り散らしますもんねえ」

三人は仕事場に小走りで戻って行く。その三人をチラと見た少女の一人がもう一人の少女に小声で話し掛ける。先の二人とは違い、この二人は表情は豊かだ。

「ねえねえ舞、さっきの人達の中にさあ、ピノキオみたいに鼻の長い人がいたよ」

「咲！無駄口たたかないの」

「ん？貴方達、何か言った？」

「ううん。何でもない…」

無表情な少女の一人に聞き咎められた『咲』と『舞』という二人の少女は慌てて言い繕った…。

(あれは…)

彼女達を別の所で見かけた人物がもう一人いた、あの庶務課係長のタシギである。彼女はこの日も上層部の目を盗んで内部告発の為に情報や証拠を集め回っていたのだった。

(あの子達、どこへ？…社長室！そうか、もしかすると何かの事で…)

タシギはそう推理すると辺りを見回す。

(まずいわねえ…あれに映ると後が大変だし、死角を探しながらだと…今はまだ午後…この時間帯じゃあ怪しまれる…)

そう、彼女は天井についている監視カメラを気にしていたのだった。

(くやしいけど追えないわ、ここは課長に報告する事にしましょ)

彼女はそう決めると庶務課に戻って行った…。

コンコン！

「おう、来たか。入れ」

ガチャ

「失礼します。仕事のご依頼の件で参りました」

と無表情な少女の一人が言う、尚、四人の少女の名は無表情な二人が霧生薫と満といい、この二人は双子の姉妹である。一方の二人の名は日向咲と美翔舞という。

「ご苦労、よく来たな。まあ、そこに座れ」

とスパンダムは例の四人をソファに座らせる、社長室には他にもあのロブ・ルッチ常務と研究所から戻ってきたブルーノ、開発研究所主任の氷室巖そしてカリファもいた。

「さて、依頼する仕事というのは他でもない。ここにいるカリファから聞いていると思うが実は我が社の研究所所長であるガジャが事もあろうに新薬のデータを独占しようとし、それを自分の手元に置いて自分しか見られないように厳重に保管している。奴め、OKサインが出るまで待てと言っておいて密かに薬を完成させ、そのデータを他社に売り渡して大もうけしようとしているのだ」

とスパンダムは大嘘をつく。

「で、お前達の出番だ。研究所に行き、ガジャから新薬のデータを取り返して欲しいというわけだ。今回の新薬はインフルエンザで苦しむ老人や子供にとって救いとなる、この俺も一日も早くこの新薬を世に広めたいのだ」

「尚、成功したあかつきには社長は特別ボーナスを出すとの仰せだ。人類の未来はお前達に係っている」

とルッチも四人に言う。

「ご依頼の内容は分かりました。ですが社長、いくつかご質問をよろしいでしょうか？」

と薫がスパンダムに尋ねる。

「ん、何だ?」  
「その例の物は書類ですか?それともパソコンかディスクまたはメモリーに記録されているのですか?」  
「それが奴はどういう状態でデータを保存してあるかをはっきりとは言わなかったのだ。ただガードを固くしてあって、強引に取ろうとするとデータを消去するようにしてあるそうだ」  
「成程、保管場所も言わなかったのですね?」  
「ああ、奴はそういう事には口が固くてな。おい氷室、お前はガジャにある程度付き添っているならデータがどこにあるのか知ってるんじゃないかねえのか?」  
「そうですね…」  
氷室は数秒考えていたが  
「そういえばあの男、確かアメリカに知り合いがいて面白い物を作ってもらったと言い、一度私もそれを見せてもらった事があります」  
と言う。  
「その話がデータと何の関係があるんだ?」  
「はい、『これにデータを保管しておけば私だけが見られるし、これを強引に開けようとすればデータは消去されて見る事はできない』と自慢しておりました」  
「それは一体どういう物ですか?」  
「確か…、『クリプテックス』とかいう容器だと…」  
「え!薫、それって確か…」  
「おや?知っておられるのですか?」  
と氷室は突然叫んだ舞に尋ねる。  
「ええ、確か二年前、フランスで猟奇連続殺人事件が起こった際に容疑者として当国の警察に疑われたアメリカの歴史学者がいたんです。確かその人の名は…」  
「ロバート・ラングドン」  
と満が舞に変わって答えると  
「あ!?そりゃ確かレオナルド・ダヴィンチの作品に関して奇妙な説を唱えている学者じゃねえのか?俺も聞いた事あるぞ」  
とスパンダムが言う。  
「おい氷室、まさかその学者と奴が知り合いだというのか?」  
「はあ、詳しい事は聞いておりませんので分かりませんがとにかくその中にデータを保管してあるようです」  
「ねえ、『クリプテックス』ってどういう物なの?」  
と咲が舞に小声で尋ねる。  
「咲、知らないの?ダヴィンチが作った機密情報を保管する為の容器よ。文字が書かれたダイヤルがあって特定のパスワードに合わせれば開くようになってるの。無理やり開けようとしたら壊したりすると中に酢が入っていて、それが壊れた拍子に紙に書かれた情報を消してしまうようになっているのよ。無論、紙と酢はガラスで区切ってあるわ」  
「うーん、成程ね。となるとまずはそれを手に入れる事が先決か…」  
「それとどこにあるかという事を突き止める必要があるわ」  
「では頼んだぞ。この氷室にもお前達に協力させるからな」  
とスパンダムが言う  
「ありがとうございます。ではこの依頼はお引き受けいたしますので早速調査に入ります」  
と薫が言った。  
「よーし!やるとしますか、これで何人もの命が救われるんだから!それでは失礼しまーす」  
と咲は張り切って退室する。  
「ちょっと待ちなさい、咲。すみません、では私達も失礼します」  
と残った舞達も退室する。それをスパンダム達はニヤッと口元を歪ませて見送った。  
「ふっ、無邪気な者ですな社長。利用されているとも知らずに」  
「ダッハッハッハ!いいじゃねえか、あの小娘共が俺達に莫大な利益をもたらすんだからな。では氷室」  
「はい、昇進の事お願いいたします」  
「ダーッハッハッハ!心配するな」

それから二三日後の夕方、研究所の一室…  
「…ふう」

「所長、お疲れの様子ですなあ」

「氷室君か、さすがに年を取ると目がつらくなるものよ」

この日もガジャはパソコンを前にして『ゴーレム』の薬効と副作用の調整にあけていた。

「でしたら今日はこのぐらいにされたらいかがですか？」

「うむ、そうするか。済まぬがコーヒーを入れてくれないか？その間にデータを処理する」

「はい、所長」

氷室は部屋を出て給湯室へ向かう、がすぐにコーヒーを入れずに携帯を取り出して掛ける。

「もしもし、氷室です。そちらから部屋の様子は見えますか？」

「どう？今、氷室さんから電話がきてるけど」

「バッチリだと伝えて、咲。部屋の中はよく見えるわ、このモニタールームからね」

電話を受けた例の少女達は新任の警備員としてモニタールームから監視カメラを使ってガジャの部屋の中を覗いていたのである。無論、氷室の手引きであった事は言うまでもない。

「満、所長は今何をしているの？」

「パソコン内のデータ処理中、で今はメモリーにバックアップしてるところ。あ、終わったようね」

そのまま四人がモニターを見ているとモニターの中のガジャは机の引き出しから小型の金庫を出してダイヤルを回すと中を開けて何かを取り出した。

「あ！あれは…」

「間違いない、『クリプテックス』よ。あの中にメモリーを入れて保管していたのね」

「でもちょっと待って、確か舞が言ってたけどあれって機密保持の為にデータを消去できるようにしているよね。酢であのメモリーの中のデータを消せるのかなあ？」

と咲が疑問に感じていた事を言うと

「大丈夫よ、ああいう機器はデリケートだから水がかかってもダメになるのよ。だから開ける時は慎重にやらなければいけないのよ」

と薫が答える。一方ガジャはクリプテックスの蓋を開けるとその中にメモリーを入れダイヤルを回して閉めると金庫の中にしまった。

「これでありかが分かったわ。ただ金庫とクリプテックスのダイヤルナンバーが分からないからそれを調べないと」

「氷室さんなら知ってるかな？」

「どうかな、聞いてみるのもいいけどダメなら自力で開けるしかないわね」

一方氷室はというと…

「失礼します、コーヒーをお持ちしました」

「ああ、ありがとう。遅かったようだが」

「申し訳ありません、お湯を沸かしている間に電話が入りまして」

「ほう、会社からの催促かね？」

「いえ、私事です…」

「そうか…。ではわしはこれを飲んで帰るとしよう、後は頼む」

「はい、お疲れ様です」

ガジャは油断していた、彼は氷室を優秀な助手として信頼していた。だがその助手に裏切られる結果になる事を予想だにしていなかった…。

ガジャが帰った後の夜…

四人の少女達は氷室の手引きによりガジャの研究室に来ていた。万が一の為、この部屋の監視カメラを切り更にはモニタールームのこの部屋が写る画面に『ただいま故障中』の張り紙を貼るほどの念入りである。

「さてと…これだ」

氷室は机の引き出しから金庫を取り出す。

「氷室さん、この金庫のナンバー分かりますか？」

「ああ、このナンバーはあの男の誕生日だと聞いているから…」

氷室はそう言うとダイヤルを回して金庫を開ける。

「よし、開いた。だが問題は…」

「これね。これをどうやって開けるか…」

と咲は腕を組んで考える、他の少女達も同じだった。因みにクリプテックスのダイヤルは四つである。

「うーん、何か手がかりになるような物ないかなあ」  
咲が頭を掻く。  
「咲、焦っちゃだめ。氷室さんは分かりますか?」  
「いや、あの男からは何も…」  
「薬の名は『ゴーレム』…!もしかして」  
舞は何かを思いつくとクリプテックスを手に取りダイヤルを回す、すると  
「あ!開いた!舞、貴方どうやって…」  
と咲が容器を開けた舞に尋ねる。  
「『ゴーレム』で思いついたのよ。あれって魔法で動く土人形なの、ただそれを動かす為にはその人形の額にある言葉を彫らなければダメなのよ」  
「それがこの言葉?」  
と薫が舞が持っている容器を見る。ダイヤルには『EMET(エメット)』という言葉に回してあった。  
「そう、これで第一段階はクリアよ」  
「うわっ、何か臭い。何なの?この液体」  
咲が鼻をつまむ。  
「少なくとも水じゃないわね、酸のどれかでしょ。とにかく…」  
と舞は言いながら中に入っているメモリーを慎重に取り出す。  
「ふう…よし、後はこの中のデータをコピーして元に戻すだけね」  
「しかし君達、メモリーにも仕掛けがあるんじゃない?」  
と氷室が言うと  
「大丈夫です、確かにセキュリティソフトが組み込まれているかも知れませんが私達にお任せください。突破してみせます」  
と満が自身たっぷりに言う、彼女はパソコンに関してはスペシャリストなのだ。  
「とにかくこれを急いでコピーし時ましょ。満、お願い」  
「任せて」  
四人はモニタールームに戻る、その後ろ姿を見送った氷室はニヤッと笑い呟く。  
「いいぞ、昇進まであと少しだ…」

さてモニタールームに戻った四人は持ってきたノートパソコンに電源を入れるとメモリーを差し込む。  
「さあ、ここから第二段階よ」  
満はキーを叩きながらメモリーの中からデータを出そうとする、が  
「やっぱり、セキュリティは万全ね。これを突破しなければデータは見れない」  
そう、ガジヤはメモリーの中のデータにすらセキュリティソフトを組み込んでいた。  
「けど残念ね、その対策はあるわよ」  
と満は外付けのハードディスクをつなぐ、この中にはハッキング用のソフトが組み込まれていた。  
「頼むわよ、『ゴーヤーン!』」  
と満はハッキングソフトを起動させる。しばらくすると…  
「よし、出たわよ!」  
パソコンの画面に『ゴーレム』のデータが映し出される。  
「やったね!満」  
「後はこれを別のメモリーにコピーするだけよ」  
「これで病人がまた多く救われる事になるわね」  
「そうね…氷室さんにも報告しないと」  
が彼女達の想いとは全く逆の現象になるとはこの時の彼女達は知る由もなかった…。

「よくやってくれた。これが君達への報酬だ」  
CP9 製薬ゼーラ本社の社長室…。スパンダムから通帳を受け取る四人がいた。  
「絶好調ナリ!うれしいです」  
「これからも大いに頼むぞ、これで多くの人々を救えるからな」  
スパンダムは彼らに笑うとカリファに目配せする。  
「では、こちらへ…」  
「またよろしく願います」  
「その時になればね」

彼女達が帰ると、入れ違いに氷室が入ってくる。

「社長、おめでとうございます!」

「ダーツハツハツハ…!!」

スパンダムは資料を見て大笑いした。これほどうまくいくとは思わなかったからだ、後は咲たちが集めた資料を分析し、後は思うままに改悪するだけだ。

「それにしてもうまく行きましたな」

「これで完全主義とほざいてた口やかましい連中を追い出せる!」

そう、ガジャを支持する勢力が社内に一定の数でいて、彼らは売り上げで堅実な実績を上げていたため文句が言えなかったのである。だが、これで彼らの追い落としが図れるのだ。

「ところで奴に気付かれないように名前を変える必要がありますが」

「そうだな…よし新薬の名前は『ゴードム』と変えておけ」

「はい、後は奴をクビにして…」

「お前が研究所所長になるというわけだ。ダーツハツハツハツハ…!!」

「どうも違和感を覚えるわね」

咲は他の三人と話していた。彼女達はスパンダムから依頼を受けてガジャ博士の持つ資料をコピーして提出するよう命じられたのであった。暗闇の中でも仕事出来る霧生姉妹がメインで見つけた資料である。

「金額が一人当たり 1000 万円だよ、これっておかしいよ」

「何か新しい収入があるのかもしれないよね…」

女性の視点からの探偵事務所として彼らは探偵事務所を立ち上げていた。そこそこ仕事は入ってきているので、収入は安定している。そこへ今回の高額の仕事である。彼女達は喜んで飛びついた。

だが、彼女達はまもなくその判断を後悔する事になる…。

「なっ、何だと!!」

「聞こえなかったのか博士、お前はもう用済みだ」

ガジャはブルーノから解雇を言い渡されていた。

「待て!あれはまだ…」

「博士、まだそんな事を言うのか。あれはもう十分に完成している、博士の役目は終わったのだ。これからは氷室君が研究所所長だ、いいな」

「氷室…貴様!」

「博士、私はもう貴方の下にいるのがいやなんですよ。ご心配なく、『ゴードム』はもうすぐ認可されますよ。開発者が貴方の名でね」

「うぬぬ…」

「さあ、荷物をまとめて出て行ってもらおうか」

ブルーノに引導を渡されたガジャは笑いながら去っていく二人を見ながら唇をかみ締めた、そして呟く。

「何たる事だ…。信頼していた者に裏切られあの『クリプテックス』と『ラー・デウス』がいとも簡単に破られるとは…。不覚じゃった…」

その後、彼はこの研究所を出て神戸へ向かう事にした、そこにあてがあったからだ。そして数日後『ゴーレム』改め『ゴードム』は恐ろしい副作用を残したまま市場に出回る事となった…。

## 2

ビアスが塔和大学学長に就任してから十日後、関西国際空港(通称:関空)にUK(イギリス)から一人の少年が降り立った…。

「♪だ～れが殺したクックロビン、あ、それだ～れが殺したクックロビン」

空港に降り立った少年、パタリロは若くしてウェールズ国王に就任した王である。彼は空港内を部下達と共にマザーグースを自己流にアレンジした曲『クックロビン音頭』を歌い踊りながら出口に向かう。その光景を見ていた周りの人々はある者は呆れ、ある者は顔を顰め、ある者は物珍しそうに見たり携帯で写真を撮ったりしていた。そんな中、パタリロ一行の中に踊りに参加しない長い黒髪の男がいた。彼の名はバンコランといい、元イギリス諜報機関『MI6』きっての名スパイであり、あの『007』ことジェームス・ボンドに匹敵する実力の持ち主である。パタリロは彼の実力を見込んで MI6 から引き抜き、彼自身のボディガードにしたのだった。

「バン、お前もやれ」

とパタリロが踊りながらバンコランに言う

「結構です!勝手におやり下さい…」

と彼は顔を顰めて答えた。やがて、出入り口に着くとあらかじめ用意しておいたリムジンに乗り込む。車が走り出すと、パタリロはそれまでの間抜け顔を改め真顔になってバンに話しかけた。

「バン、黒玉葱は潜入させたか？」

「はい、陛下のご指示どおりに」

彼の言う『黒玉葱』とは彼直属のスパイ達の事である。

「よし、今やあの壬生国には世界中が注目を集めているからな」

「はい、かの国は国会議員ならびに国家公務員の派遣制度というものを採用しましたからな」

「うむ、近々選挙があるそうだが」

「その事です報告によればどうもリブゲートなる企業が陰謀を巡らせているそうです」

「ほう、となると壬生国は早くも現制度の試練にぶつかるといわけだな」

「はい」

「分かった、では予定通りオーブへ向かうぞ。表敬訪問だ」

「はい、かしこまりました」

このパタリロ、普段は間抜けな顔をして珍妙な行動をとったりしてしているが実はかなりの洞察力があるのだ。普段の行動は世間を欺く為に仮面を被っているものであり、それを知っているのはごく一部である。

「これは陛下。ようこそわが国へおいでいただきました」

オーブについたパタリロ一行は王宮前で出迎えを受けた。出迎えたのはオーブ国会議長であるギルバート・デュランダルである。

「ウンニャ、出迎えご苦労」

パタリロは普段の間抜け顔に手を猫の前足のよう丸めた格好で答える。

「それにしても驚きましたな、わが国に表敬訪問などとは」

「な～に、久々にキラと話がしたくなってな。それで来たわけだ」

「左様でございますか、わが国王がお喜びになられるでしょう」

「そうかそうか、来たかいがあったな」

パタリロとデュランダルは王の間へ歩きながら話す。

「パタリロ王!久しぶりだね」

「ウンニャ、久しぶりだな」

王の間でパタリロとオーブ国王、キラ・ヤマトが再会を喜び合う。二人は学友であり、よく国のあり方について討議しあった。オーブの先代国王であったウズミの生き様をパタリロも目の前で学んだ事もあり、その事を国の経営方針に生かしているのだった。ちなみに十年前のテロにもオーブとウェールズは手を取り合ってテロリスト達に立ち向かい奮闘した。

「十年ぶりだな。こうして会うのも」

「そうだね、ここではなんだから」

「ウンニャ、そうだな。だがその前に…」

「え?ま、まさか…」

キラがうろたえた表情を見せるのにお構いなく

「ああ、お前もやるか?それでは再会を祝して…パパンがパン!♪だ～れが殺したクックロビン、あ、それだ～れが殺したクックロビン…」

とパタリロは『クックロビン音頭』を歌い踊り始めた。キラは困惑した表情をしながら苦笑し、オーブ側の人々も呆れた表情で彼が踊るのを見ていた。その中の一人、国王補佐であるシン・アスカは手を顔に当てて目も当てられないという仕草をして思った。

(こいつ、本当にこれでウェールズ国王なのかよ…。ただのアホだ…。)

が、彼の踊りをにこやかに見ているもう一人の男がいる。オーブ防衛大臣であるアンドリュー・バルドフェルドである。彼もキラ同様パタリロの素顔を知っていた…。

「正直、国王っていうのも荷が重いもんだね」

「キラ、お前らしくもない。十年前の時にどんな困難があろうとも立ち向かおうと誓ったではないか」

「うん、そうだったね」

キラとパタリロはテラスで紅茶を飲みながら話をする。その傍らにはあのバンコランと一人のメイドが控えている。

「十年前か…よくこうやっていろいろ話したよね」

「ウンニヤ、喧嘩もしたなあ。お前の頭にたんこぶをいくつ作った事か…」  
「アハハハ…そうだね、僕も君の顔にアザを作った事もあったっけ」  
「そうだな、散々やった後にお互いの顔を見て笑ったもんだ」  
和やかに話が進む中、急にパタリロは真顔になりキラの耳に顔を近づけ  
「ところでここに来たのは他でもない、ちょっと壬生国についての事なのだが…」  
と彼に囁く。  
「内密な事のようなだね。人払いする？」  
とキラが小声で返すと  
「ああ、そうしてくれないか」  
とパタリロは答え  
「バン、二人だけで話がしたい。お前は下がっている」  
とバンに言った。  
「はっ、かしこまりました」  
と彼が答えて部屋を出るとキラもメイドに  
「悪いけど君も部屋を出てくれないか。ちょっと内密な話があるんだ」  
と彼女に言って下がらせた…。

「で、話って？」  
「うむ、今、壬生国の国会議員ならびに公務員の派遣制度に世界中が注目しているのは知ってるだろう」  
「うん、このオーブからも留学生を何名か送ったよ」  
「無論、我がウェールズからもだ。だが、今回の選挙でこの制度が試されるのも知ってるだろう」  
「勿論だよ。あの国にリブゲートが進出しようとしているからね」  
「そうだ、そのオーナーの事なんだがあの喪黒福造という男、私が調査したところによるとどうもチャイナマフィアが後ろ盾としているようだ」  
「えっ!？」  
「それだけではない、奴には弟がいるだろう」  
「確か、福次郎っていったっけ」  
「ああ、その男の妻がアメリカ副大統領の娘だというのは知ってるな」  
「うん、となるとアメリカも後ろ盾にする気かな」  
「その様だな、今のアメリカ大統領、ニコラス・J・ベネットはある意味野心家だ。壬生国が親米国家となれば大いに歓迎するだろう」  
「そうだね、でも今のアメリカは…」  
「そう、知ってのとおり、あの国はギャンブル国家だ。あの国の経済政策を真似ればどうなるか、お前には分かるよな」  
「うん、国民内の経済格差が生まれ犯罪は多発化してしまう…」  
「そういう事だ。私は今、奴らの行動を追っている。黒玉葱を使ってな」  
「僕のほうは彼に壬生王室への手紙を託しているんだ」  
「彼？」  
「高野広志さ」  
「!十年前にあのテロリスト共を壊滅させた…。そうか、今も東奔西走の活躍だな」  
話に一息ついたパタリロはふと気がついたようにキラに尋ねる。  
「そういえば、ラクスは姿が見えないがどうした？」  
「ごめん、ラクスは『南斗園』という孤児院に行ってるんだ。十年前のテロで親を亡くした子が多いからね、その子達を一人でも多く救いたいのださ」  
『南斗園』という孤児院は教会の建物を利用して造られた施設である。最初の経営者はオウガイという人物であったが20年前に経営難に陥った。それで負ってしまった借金を苦にしてオウガイは自殺してしまったがウズミ王が公営施設として建て直し、今は再び民間施設となっている。  
「そうか…もうあんな事は御免だな。あのテロで…孤児達は我々が理解しようもないトラウマを負ってしまった」  
「そうだね、僕達は彼らの心が安らぐ世界を創る義務があるから」  
「ああ、壬生国の子供達にもあんな悲劇が起こらない事を祈ろう」  
二人は青空を見上げた…。

その頃、オーブ王妃であるラクスはその『南斗園』の園長室で現園長のフドウと話していた。フドウは身長二

メートルを越す巨漢だが、性格はとても温厚で孤児達からは『フドウの父さん』と呼ばれ親しまれている。

「…元気ですわねえ、今のあの子達は」

ラクスは園長室から窓の外で遊んでいる孤児達を微笑ましく見ながら言う。

「本当ですなあ、王妃様。彼らが目の当たりにした悲劇が嘘のようです」

とフドウが言う。

「ええ、しかし…」

とラクスの顔が曇り始めた。

「壬生国の事です。あの国は試されています、子供達の未来を希望をもたらすか悲劇を招くか…。今度の選挙次第でしょう」

とフドウは彼女の表情を察したように言う。

「ええ、その選挙に不正が蔓延ろうとしている。加えて関東連合が我がオーブを敵視している、わが国は壬生国とただ友好的にやっていきたいだけなのに…」

とラクスが言った時、園長室のドアが開き一人の子供が入って来た。

「どうした？」

とフドウが子供に尋ねると

「フドウの父さん、喧嘩してる子がいるよ」

とその子供が答えた。

「あらあら、困りましたわねえ」

「やれやれ、しょうがないなあ。どれ、どこで喧嘩しているのかね？」

とフドウは頭を掻きながら子供について行こうとすると

「私もまいりますわ」

とラクスもついて行った。

「ほう、あのパタリロ王が…」

パタリロのオーブ表敬訪問にいち早く反応したのは壬生国防衛大臣である朽木白哉だった。彼もパタリロとは学友であったのだ。

「どうやらあの国王も我が壬生国の動向に注目しているようだな」

「兄様、パタリロ王はこの国を探りに来たのか？」

白哉の亡き妻の妹であるルキアが彼に尋ねる。

「ああ、パタリロという王は洞察力がある。何せ、オーブ王室とは親しいし十年前のテロの時はオーブと共にいち早く立ち向かっていったからな。恐らくわが国にスパイは放っているはず」

「兄様！」

「放っておけ、わが国に害する為に放ったのではない。軍事機密までは見せるわけにはいかないがな」

その時、内線が鳴る。

「私だ…。ほう、リュウオーンが話したい事があると…。分かった、通せ」

「リュウオーン！」

ルキアが緊張した顔をする

「やめろルキア、あの男はカイオウからの使者だ」

「しかし兄様、奴等は…」

「ふっ心配するな。恐らく今度の選挙に立候補する喪黒という男の事であろう。丁度いいルキア、更木と日番谷を呼べ。彼らにも話に立ち会ってもらおう事にしよう」

「…」

「どうした、不服か？」

「いっいえ、分かりました兄様」

ルキアは戸惑いながらも二人を探しに部屋を出て行った。ちなみにリュウオーンとはカイオウ配下の軍人であり、カイオウの防衛省乗っ取りの策謀を手助けた男である。その男が白哉のところに来たのは朽木派とカイオウ派の仲介役をしているトキが兄のカイオウに口ぞえをしたからだった。果たしてこの二派は一致協力する事ができるのであろうか…？

「で、何の用？」

ここは関東連合議会の議員会館内にある涼宮ハルヒの部屋。

ハルヒはここで学生時代の友人であった紅月カレンと会っていた。カレンから話があると言ってきたのである。

「ハルヒ、貴方サウザーや喪黒グループといろいろ共謀しているわよね」  
「共謀?何言ってるの、この国を守るために奔走しているのよ、ほ・ん・そ・う!」  
「そう、なら私もハッキリ言わせてもらおうわよ。あいつらと縁を切ってオーブに歩み寄ったらどうなの」  
「!アンタ本気で言ってるの!?!」  
「ええ、本気よ!貴方、あいつらにいいように利用されているのよ。それだけではないわ、貴方の愛国心の為にこの関東連合がメチャクチャになるのよ。それでもいいの?」  
「ふざけないでよ!いい、オーブは今、壬生国に近づいてこの関東連合を脅かしているのよ。現にオーブから留学という名目で何人か壬生国に派遣されているのよ!ここで巻き返さなければそれこそこの国がメチャクチャになるわ!」  
「それはあくまで『留学』でしょ!オーブはただ壬生国の制度を知りたがっているだけじゃないの!何でそんなにオーブに怯えるのよ」  
「怯えてなんていないわ!言っただけよ、私はこの国を守りたいだけなんだって!」  
「本当にそれが『国を守る』ことになるの!?私には貴方のやり方から『国を滅ぼす』ことにしか見えないけど」  
「な、なんですって!!」  
「ハルヒ、いいから落ち着いて修学旅行の頃を思い出して。あの時、私達中国に行ったわよね」  
「ええ、そうだったわよね」  
「私、あの時『愛国心』というものがどういうものか考えさせられたわ。その事の為に他国の人を不幸にし恨みをもってしまった…。そう、あの『南京大虐殺記念館』(作者註:『南京大虐殺記念館』の正式名称は『侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館』という:Wikipedia 日本語版より)を見てから…」  
「私はそうは思わない。あそこを見て分かったわ、もう何十年も経ったっていうのにいまだに恨みを引きずっていることと余りに自分達の被害を誇張していることに。あの国は被害妄想なのよ」  
「何言っているの!この日本が侵略したことは事実でしょ!それに拡大解釈とはいえあの戦争で何十万人も死んでいることは確かなのよ!貴方、侵略された人々の立場になって考えてみなさいよ、恨んで当然よ!」  
「いい加減にして!それはあくまで自国が有利に立とうとするための謀略よ!『自分達は被害者だ、だからお前達が償って当然だ』って言って自分達の言いなりにしようとしているだけじゃない!」  
「ハルヒ…、貴方の言う『愛国心』って今貴方が言った自国を有利に立たせる為じゃないの?その思いが野望を持つサウザー達に利用されているのよ!いい加減に目を覚まして!」  
「まだそんな事を言うの!!もう聞き飽きたわ!アンタの世迷言!!話は終わりよ!帰って!!!」  
「…ハルヒ」  
「帰りなさい!!!」  
ハルヒに話を切り上げられたカレンはソファから立ち上がり無言でドアに向かうとハルヒに向き直り、毅然とした顔でこう言った。  
「残念だわ、私の忠告を聞いてくれなかったことに…。でも最後にこれだけは言わせてもらおうわ。貴方哀れね、その『愛国心』に捉われる余り、視野が狭くなっているんだから…。いつかは思い知ることになるわよ、あいつ等に利用されていることにね。さようなら」  
カレンが出て行った後、ハルヒは言った。  
「ハッ、思い知ることになるのはどっちなのよ!」

同じ頃、関東連合軍横須賀基地でも二人の人物が言い合いをしていた…。  
「海江田一ツ!!貴様、正気かあつ!!」  
「ああ、正気だ」  
この基地の施設の一室で海江田四郎に深町洋が怒鳴っていた。海江田が関東連合軍を辞め、壬生国に移籍するというのである。それは海江田が今の関東連合に愛想を尽かしたのが理由だった。  
「深町、いつまでも『国』というものにしがみついてはその『国』ごと人は滅びるよ」  
「それがお前の言い分か、だがなあ!その『国』の中で俺達は生きて人生を送っているんだぞ!『国』があつてこその人なんだよ!」  
「そうかな?人あつての『国』ではないのかね?」  
「そう切り返すか、まあいい。ならばついでに言わせてもらおうぜ。貴様、何故行き先に壬生国を選んだ?」  
「フッフ、壬生国は選挙が行われるのは知ってるだろう。その事で混乱が起こる、それを利用して私の夢を叶えようというわけさ」  
「何!貴様、混乱のどさくさにまぎれて…汚ねえ野郎だ!」  
「ならばお前に問う、その混乱の中心にいるのはリブゲートグループオーナーの喪黒福造だぞ。あの男の評判は聞いているだろう、それでも私のやり方を『汚い』と言えるか?」

「当たり前だ!!貴様もアイツと同じじゃねえか!!どうせ何だかんだ能書きを並べても貴様もただ自分の思うように『国』をおもちゃにしたいだけじゃねえか!!」

「なるほど…ではこれだけは言わせてもら。わが国は知ってのとおり連合国となった。一国の平和をむさぼり、国民がだれた時代は終わったのだ、『国』のあり方を問うのは今しかないと思うのだがね。私はそれをこの『日本連合国』という国に問いたただけだ。そして地球というこの星を一つの『国』とする、これが私の夢だ」

海江田はそう言うともまるで何も未練が無いかのように颯爽と部屋を出て行った。あとに残った深町は傍らの机を拳でドンと叩き、こう言った。

「何が『私の夢』だ、貴様の言うのは『夢』じゃねえ!『野望』だ!!バッカ野郎が!!」

「おいちょっと待て!!そりゃどういうことだ!!」

東京にある村西芸能事務所でこの事務所に所属するアイドル、風間宙人(かざま ひろと)がテレビ局のプロデューサーであるイヴァン・ニルギースの胸倉を掴んで怒鳴っていた。ニルギースがアイドル発掘プロジェクトをリブゲートに持ち込んでネット中継やブログの権利を渡し、各芸能事務所に協力を頼んでいて、この事務所にも来て社長に企画の参加を持ち込んできたのを聞きつけてその話の現場に乗り込んできたのだ。

「どういうことかって?今、社長さんに話したとおりのことだが」

「何が話したとおりのことだ!!アンタ、いつからリブゲートの社畜に成り下がったんだ!!」

「やめなさい、宙人君」

社長の村西が宙人を止めようとする、が

「社長!!まさか貴方もこの男の話に乗るんじゃないでしょうね!?!」

と宙人の怒りは収まらない。

「おいおい、今やリブゲートは破竹の勢いだぞ。俺はただそれを利用してだな…」

「ふざけるな!!俺は知ってるんだぞ!!!リブゲートがえげつない経営をしていることもアンタの企画がアイドルをただの商品にしようとしていることも!!そんな企画の参加が呑めるかよ!!」

「ならばリブゲートはここを潰しにかかる、それでもいいのか?」

「何だと!?アンタ、どこまで成り下がれば一っ!!」

宙人がニルギースに殴りかかろうとした時、

「やめるんだ!宙人!!」

「宙人君、やめて!!」

「宙人君!!何しようとしているの!?やめなさい!!」

宙人と『SHIPS』というコンビを組んで活躍している日渡星司、星司に憧れてアイドルとなった月島きらり、きらりのマネージャーをしている雲井かすみが部屋に来て宙人を止める。

「……」

部屋の中は一瞬静まり返り、陰悪なムードが漂う。やがて、宙人がニルギースの胸倉をつかんでいた手がゆるみ、ニルギースは彼の手を振り払い服を正す。宙人は右手の拳を握りしめたまま、その拳の下ろしどころに迷っている表情だった。

「ところで社長さん、お答えを訊かせていただいてませんが」

とニルギースが尋ねると

「悪いけれど、貴方の企画にはうちの事務所は参加しない。理由は今彼が言ったとおりだ」

と村西はきっぱりと断った。

「そうですか…それは残念です、仕方がありませんな」

とニルギースは表情ひとつも変えずに部屋を後にした。宙人はその言葉を聞くと怒りのあまり、壁に拳を叩きつけて彼を罵った。

「くそっ!見損なったぞ、イヴァン・ニルギース!!」

「宙人君…」

きらりが悲しげな表情で宙人を見つめる、彼女は宙人がニルギースを名プロデューサーとして尊敬していたことを知っているからだ。この時彼女の飼い猫であるな一さんが来て宙人の顔を見ると、この猫も悲しげに

「な～」

と一声鳴いた。

一方、ニルギースは事務所を出ると前に止めてあった車に乗り込む。そこには彼のアシスタントであるシャシャが助手席に座って彼を待っていた。

「ニルギース…」

「失敗したよ。あそこの社長も相当気骨あるな」

「……」

「何も言うな、最もあそこはああでなくてはな、俺はすっかり嫌われ者だが」

ニルギースが自嘲気味に言う

「うん、シャシャ分かってる。ニルギースが本当にやりたい事」

とシャシャが微笑みながら答えた…。

4

「そうか、オーブにパタリロが来たのか…」

ここは関東連合首相官邸。オーブにパタリロが来日したその夜、関東連合議会議長であるギレン・ザビは側近の一人であるエギーユ・デラーズから報告を受けていた。

デラーズは防衛大臣でありその下にいるキリングという頭が切れる男が管轄している『サイクロプス』という情報組織が入手した情報を報告しに来たのだった。

「閣下、あの国王は表向きは表敬訪問だといっておりますが実際には壬生国にスパイを放っておる模様です。恐らく閣下が密かに支援していられしやる喪黒氏を警戒しての事だと私なりに判断いたしますがこれをどう思われますか？」

「ふむ、あの国王はともかくとしてスパイは厄介だな。何らかの妨害工作を行う必要はある」

「分かりました、キリングに『サイクロプス』を動かすよう指示いたします」

「うむ」

とギレンが頷くと

「あの…閣下」

とデラーズは不安な面持ちでギレンに話しかける。

「ん?なんだ」

「私ご時がこう言うのもなんですが果たしてアメリカを全面的に信頼してよろしいのでしょうか?かの国は…」

「この私があの国にベッタリくっついていてとも思っているのか?デラーズ」

「と、仰いますと?」

「私はあの国など信用しておらんよ、むしろ利用しているのだ」

「……」

「考えてもみたまえ。あの国が言う『グローバル・スタンダード(国際的標準)』なぞ彼らが覇権を誇示したいが為に振りかざしている大儀名文なのだ。あの国は自国がNo. 1の力を持たなければ気が済まない、そうであろう」

「は…はい」

「そのアメリカと真正面から対立してみたまえ、その結果はあの第二次世界大戦を紐解けばお前にも分かるであろう」

「…はい」

「だからこそアメリカからの警戒を少しでも逸らす為に従っている振りをし、その力を利用しているのだよ」

「…仰る事は分かります。しかし…」

デラーズが何か言おうとすると

「『しかし』何だね?私がアメリカに逆に利用されているとでも言いたいのかね?」

とギレンは反論を許さないとでもいうような目つきでデラーズの言葉を遮って言う。

「そ…それは…」

デラーズは思わず言い淀む。

「ふっ、安心したまえ。私は間抜けなミイラ取りではない、警戒しているところは警戒しているのだ。あの国の頭脳集団を手玉にとってみせるさ」

「…分かりました、余計な事を申しあげました」

デラーズは頭を下げる。

「よい、お前が私に忠実である事はよく知っている。それはそれとして今はオーブとウェールズのスパイだ。早々に部署に戻りたまえ」

「はい、閣下。パタリロ王の方はいかががいたしましょうか?」

「あんな王の事は放っておけ、むしろ元 MI6 の男が気にかかる。分かったな」

「はい、では失礼いたします」

デラーズは官邸を出ると車に乗り込み、防衛省に向けて走らせる。だが彼の顔はまだ憂い顔だった。彼は車の中で思う。

(閣下はアメリカを甘く見すぎている。彼らは閣下以上に強かなのだ。それにあのパタリロ王も…。閣下は未だに間抜けな表の顔しかご存知ないのかもしれない…)

「…そうでしたか。閣下はそんな事を…」

防衛省に戻ったデラーズは側近の一人で事務次官であるノイエン・ビッターと話していた。

「そういう事だ、閣下はアメリカの恐ろしさを理解しておられるとは思えぬ。『あの国の頭脳集団を手玉にとってみせる』と豪語されていたが…」

「確かに…アメリカ政府は強かです、あの国は移民で成り立っておりますから人材は豊富です。それに学問に関しても政府と結びついているところもある。ですから外交力に関してはこの関東連合いや日本連合国よりもはるかに上回っております」

「その通りだ、ビッター。カリスマだけでは集団の頭脳には対抗しきれない、その事を私は閣下に言いたかったのだが…、聞き入れてくれる態度ではなかった。あの高野広志ですらも対立する意見の持ち主を周囲の側近に採用して問題点を見出そうとしているのだが…」

「……」

デラーズもビッターも関東連合首相だったデギン・ソト・ザビを首長としていた『ジオン党』の結成以来から所属する人物である。

二人ともギレンが唱える『旧日本国の政治腐敗からの脱却』・『税制改革による富の再分配』に同調して入党し、彼を慕っていた。しかし、『ジオン党』が政権を取ってからギレンは実の父親であるデギンを差し置いて急進的に政治を断行、アメリカとの協調路線を強行的に推し進め、国内では法人税に所得税の強化だけでなく消費税の大幅な増税を行った。加えて、ギレンは「もう貴方が出る幕はなくなった」とデギンに引導を渡して引退させ、代わりに和泉孝四郎なる男を党首兼関東連合首相に据えた。二人は彼のやり方に危機感を感じていたが連合国になる前の日本の経済政策の失敗、例えば仕事をスポット派遣に開放したが為に富の集中化が進んだ事などの現状を知っているだけでなく、ギレンのカリスマ性にも惹かれていた為に直言できなかった。ましてや彼の政策によって国家財政が潤い始めたという結果が出ているので余計に言い出せるような状況ではない事も二人は感じていた。

「かつて民自党が執った政策によって国民の間に貧富の差が開き始めた。それを閣下は正そうとされ、結果は見ての通り膨大な赤字国債を完全に処理する事ができた。だが急ぎ過ぎている、それを力で抑えこもうとすれば反発は必須だ」

「あの壬生国に対する工作にしてもです、大臣。特にあのリブゲートは劇薬に等しい。いずれにせよ、そのしっぺ返しが来るはずです」

「……」

二人は関東連合の行く末に暗いものを感じていた。

「お帰りなさいませ、ギニース様」

場所は変わってここは田園調布。ここはいわゆるセレブ達が住む邸宅が多い所である。その邸宅の一つに文部科学大臣であるギニース・サハリンが帰宅したのはデラーズがビッターと話しあっている頃であった。

「閣下にも困ったものだ」

ギニースが呟いたのを

「ギレン閣下がどうかされましたか？」

と彼を玄関で出迎えた執事のノリス・パッカー드가聞いて尋ねる。

「うむ、教育予算を当面は削ると仰られた。その分を外交予算に回すそうだ」

「やはり壬生国への工作に重点をおかれませんか？」

「ああ、だが反発は必須だろう。壬生国への干渉という事が見え見えだからな、まあ尤も…ウツ、ゲホツ!ガホツ!」ギニースは急に咳き込んでその場に崩れ落ちる。彼は生まれつき体が弱いのだ。

「だ、大丈夫でございますか!?!」

とノリスが彼を支えようとすると

「ああ大丈夫だ、心配するな。薬はちゃんと飲んでいる」

とギニースはそう言って立ち上がり

「それよりもノリス、アイナの行方はまだ分からないのか？」

と尋ねる。

「申し訳ありません。懸命に探してはいるのですが…私の力量が至らないばかりに…」

「そうか…もうよい、探すのはもう打ち切れ」

「よろしいのですか？」

「ああ、それにしても愚かな妹だ。あんな男にうつつを抜かした挙句に駆け落ちとは…サハリン家の恥だ!」

ギニースは不快な顔になる。彼の妹であるアイナは天田四郎という男と恋に落ちたのだが彼は家の格式に傷

がつくと猛烈に反対した為、家を飛び出して行ったのだった。

「ところでお食事はいかがされますか？」

とノリスが尋ねると

「いや、済ませてきた。用があるまで下がっててくれ、一人になりたい」

とギニアスは言う。

「かしこまりました」

とノリスは答えると自分の部屋に戻る、が実は彼はアイナの居場所を知っていた。見つからないと嘘をついたのは彼が彼女に同情的であったのと彼女が家を飛び出した事が政治的抗議の理由でもあったからだだった。彼は部屋に戻りながら思う。

（アイナ様…。貴方様は常々『私はお兄様の手足ではない』と仰られてた…。そのお気持ちは理解できますが…。ギニアス様もギニアス様で貴方様の事を大事にされておられるのです。そのお気持ちだけは分かっていたきたい、それまではこのノリス、貴方様の事は伏せさせていただきます…）

この関東連合議会には与党であるジオン党の他、ギアス連合会、ティターンズ党、日本連邦党などの政党がある。

翌日の夕方、その政党の一つであるギアス連合会の会議が国会議事堂近くにある連合会本部を置くビルの会議室で開かれていた。

「今日、主だった者達に集まってもらったのは他にもない、ティターンズ党から連合の話を持ちかけられた事について皆の意見を聞こうと思ったからだ」

とこの連合会代表であるルルーシュ・ランペルージが議題の説明を始める。

「彼らが現与党であるジオン党のやり方に不満があるのは知ってのとおりであるし、我々連合会も同じだ。そこへ今日の予算委員会で当面は外交に予算を集中させるという決定となった。それ故、彼らは我々と連合する事によってジオン党と対等に渡り合おうとしているのだが…諸君らの意見を伺いたい」

「ケッ!ご免だね、奴等と手を組むなんざ!!」

真っ先に反対したのは元『ヤマト正党』の一員であった玉城真一郎であった。

「理由は？」

とルルーシュが正すと

「俺的にはいけすかねえんだ!賄賂は取り放題の贅沢三昧、おまけに政権獲得の為に手段を選ばないというところじゃジオンの連中と同じじゃねえか!」

と玉城は口汚くティターンズを罵る。

「なるほど、他に意見は？」

「俺も玉城と同じだ。奴等は移民政策に反対しているどころか排除しかねないところがある、元々移民だった連中も彼らの中にいるのに」

と玉城と同じ政党にいた扇要も彼の意見に同意する。

「しかし…」

「スザク、お前は違うのか？」

と扇は何かを言いかけようとした樫木スザクに問いかける。

「いえ、ただ玉城さんが言ってたじゃないですか。ティターンズは政権獲得の為に手段を選ばないって。だから…」

「何だよ、あいつ等にビビってるのか?お前は」

と玉城が彼を馬鹿にするような目つきで言うと

「違います!ただ、僕ら単独でジオンに立ち向かうのは愚かだというのはここにいる皆さんも分かってらっしゃるでしょう。だからといって彼らと組むのは僕らは使い捨て同然か彼らに吸収されるかどちらかでしょう。それ故、組むなら別のところと組むのがいいのではないかと言いたいんです」

とスザクはキッとなって言葉を返す。

「ならばスザク、お前に尋ねるがお前なら我等と組むのに相応しい相手は目星をつけてあるのか？」

とルルーシュが彼に質問する。

「ああ、ただその前に言っておくけど僕の場合はあくまで人が対象であって政党で決めたわけじゃない」

「で、その相手とは？」

「…シャア・アズナブル、それにガルマ・ザビ」

「!!ふざけんな!!ジオンの連中じゃねえか!!与党の連中に媚を売れってのか!?!」

スザクの発言に玉城がさっそう反応し、怒りを露わにする。

「だからその前に言った筈です!人を対象にしたわけだと。ジオンの中にだって不満分子はいる筈です、それに」

今言った二人は今のギレン議長のやり方とは違う考えを持っている。本会議の後、彼らが別の場所で話しているのを何度も見ているから僕には分かる」

「お前なあ、この政治の世界は騙し合っているのが分かんねえだろ。表向きにそうやっているだけじゃねえのか？俺はどうも信用できねえ」

「玉城さんは二人を見ていないからそう言えるのも無理はないけど…」

「何!？」

「やめろ、玉城。いいから落ち着いてスザクの意見を聞け」

とまた怒りの反応を示した玉城を扇が制する。

「しかしなあ、扇」

「ならば、私から発言させてくれ」

と言い出し、手を挙げた人物に全員が注目する。

「大滝さん…」

彼らが注目した先には元『鏡水会』所属の大滝淳がいた。

尚、言い遅れたがこのギラス連合会はルルーシュを党首とした親仏派の『黒騎士党』、彼の兄であるシュナイゼル・エル・ブリタニアを党首とした親英派の『アヴァロン党』、スザクの父親である枢木ゲンプが立ち上げ、玉城や扇が所属していた『ヤマト正党』、そして大滝淳が幹事を務めた『鏡水会』などの少数派が一つに統合した政党である。因みにこの会議には C.C ことシシー・クラフト、紅月カレン、シャーリー・フェネットも参加しており、スザクとシャーリーは元『アヴァロン党』、シシーは元『黒騎士党』、そしてカレンは元『ヤマト正党』所属である。

「では大滝さん、どうぞ」

ルルーシュは大滝に発言を促す。

「スザク君が挙げた二人についての事だが実は彼が言っている事を裏付ける事を聞いているんだ」

「へえ、どんな事を」

「日本連邦党の資金公開を知っているだろう、彼らにそうするように密かに提案したのがシャア氏だというのさ」

「まさか!？」

「それだけではない、更に彼の人柄を裏付ける経歴がある」

「と、いうと？」

「松坂征四郎という男の名を聞いた事があるかい？」

「聞いた事ある、確か今は GIN(公権力濫用査察監視機構)にいる人物ね」

と今まで黙っていたシシーが言う。

「ああそうだ、その男の秘書をしていたというのがシャア氏なんだ。松坂氏は権力というものに関してはかなりシビアな信念を抱いている人だからシャア氏もこの人の影響を大きく受けているはずだ」

「…でそのシャアはいいとしてガルマはどうなんだよ。あいつはザビ家の一族だぜ」

と玉城はまだ不審な顔をして大滝に続きを促す。

「そのとおりだ、だが兄であるギレンと全く違う点は舅である千葉市長のエッセンバッハ氏の影響が強いという事さ。彼もまた政治資金の公開を自ら率先して行っている。それだけでも清廉な人物といえないか？それに政治資金の公開は我等ギラス連合会だってやっている事じゃないか。尤も資金を提供していただいている神代剣氏は個人で我が連合会に献金しているとマスコミにプレスリリースしているがね」

「私からも発言させてもらってよろしいかな？」

と一人の盲目の老人が手を挙げた。彼の名は西田啓(ひらく)、憂国の国学者である。目が見えないのは事故や病氣などではなく連合国になる前の日本の現状に失望し、自分で目を傷つけたからだ。因みに彼は政治家ではなくこのギラス連合会専属のオブザーバーとしてこの会議に参加している。

「どうぞ、西田さん」

「ありがとう、君達は今のジオン党のやり方に反発して連合会を立ち上げた。当たり前といえば当たりの事だが今のジオンのやり方は強引すぎる。だが、やり方が性急故について行けない者もいる筈だ。それが君達であり、他の野党だ。だが、ティターンズもまたジオンと同じように強硬派が多い故に排他的だ。私は知ってのとおり国学者であるし、日本生まれの純粋な日本人だが移民まで排除しようとしているティターンズのやり方は好かぬ。それではかつてアメリカが行った移民排除政策と同じではないか、我々も排他的になってはならない。それにジオンとて一枚岩ではないのだ、玉城君が不安になる気持ちも分からないでもないが本当に国をいやこの連合国の国民の事を考えるなら我々と同じ憂国の者達と手を取り合うべきではないかね」

西田の発言に皆納得する、が玉城だけはまだ仏頂面をしていた。

「玉城君、まだ不審感が拭えないようだね。ではこうしようではないか、まず我々は日本連邦党でも気骨あるロンド・ベル派と手を組む、それから彼らを通してスザク君が挙げた二人と接触する。これならどうだ？」

と大滝は提案を一つ玉城に持ちかける。

「それはいい、俺ももし組むならばロンド・ベル派と組もうと思っていたところだ」

とルルーシュも賛同する。

「僕も賛成だ。玉城さん、ロンド・ベル派なら信頼はできるでしょう。この際です、シャア氏とガルマ氏に会って腹を割って話をしてみたいかがですか？僕も同行しますよ」

とスザクも賛同し、大滝も

「君さえよければ私も同行してもいい、彼らやロンド・ベル派とも話し合ってみたかったところだ」

と玉城を説得する。

「…しょうがねえなあ」

「よし、それでは決議に入る。ティターンズとの連合を望む者は手を挙げよ」

とルルーシュが発言する、が誰も手を挙げない。

「ではロンド・ベル派及びシャア・アズナブル、ガルマ・ザビと手を組むという事で一致したという事でいいか？」

「異議なし!!」

全員が答える。

「よし、よって我々はティターンズ党との連合はしないという事に決定した。尚、ティターンズ党へは俺から連合を断ると言っておく。これにて会議を終了する。以上、解散!!」

会議が終わり、解散しても会議室にはルルーシュの他、数人が残っていた。まだ話し合う事が残っていたからである。

「…そうか、彼女に言うべき事は言ったのだな、カレン」

「ええ、でもあの子どうしようもないわ。この関東連合を守る事で完全に凝り固まってしまってるのよ。手の打ちようがないわ」

「じゃあ、もうハルヒは…」

「ええ、もう縁を切ったほうがいいわね、シャーリー」

「そんな…。どうにかならないの？」

しかしそのシャーリーの問いに対し、カレンは無言で首を振った。

「そう…。ダメなの…」

シャーリーは沈んだ表情になる。

「ところでそれはそれとして例の連中はどうなの？あの親玉は壬生国で選挙運動を始めたしこの国でもニルギースの案に乗って全日本テレビと組んだわよ」

とシシーが冷ややかに話題を変える。

「そうだな、あのテレビのひどさは俺も聞いている。低俗な番組ばかりで視聴率一辺倒だからな、だからあの男の案に乗るわけだ」

「しかも、その利益の一部がリブゲートにも回る。どんどん喪黒寄りになっていく」

とスザクはため息をつきながら言う。

「しかも例のアイドル発掘番組から出てきたのが…」

とルルーシュは言いながら一人の男に目を向ける。

「あの三人組だったよな、清麿」

「あ、ああ」

と目を向けられた男、高峰清麿が慌てて答える。それから

（はあ、何で水野がああ三人組にいるんだよ…。アホ丸出しなうえにあれでレポーターまでやってるっていうからなあ…）

と呆れ気味に心の中で呟く。尚、彼は元『鏡水会』所属であり、彼が言う『水野』とは幼馴染の水野鈴芽の事で彼女がメンバーとなっている三人組の名は『ロコ』（スペイン語で『馬鹿』という意味）である。

「そういえばディードハルトもミレイも言っていたな、ディードハルトは上司から視聴率アップをこれでもかと迫られているし、ミレイはセクハラで『うつ病になりそうだ』とぼやいていた」

この二人は全日本テレビで働いており、ディードハルトは上級ディレクターであり、ミレイは木更津にあるアッシュフォード学園創立者の孫娘にして元生徒会長、現在はお天気キャスターをしている。

「さて…」

とルルーシュが何か言おうとした時、コンコンと誰かが会議室のドアを叩く音がした。

「開いているぞ、入れ」

ガチャとドアを開けて入ってきたのはルルーシュの弟で彼の秘書を務めているロコと兄のシュナイゼル、それにジェナス・ラグナ・セラの三人組だった。

「やあ、やっているな」

とシュナイゼル。

「兄上…。ここに來られたという事は何かあったのですか？」

とルルーシュは彼に尋ねると

「兄さん、その前に報告したい事があるんだけど聞いてくれる？」

とロロが代わって答える。尚、ロロはルルーシュと彼の妹であるナナリーとは血のつながりが無く、実はランペルージ家の養子である。彼は元々ランペルージ家に入りする庭師の孫であったが、家族が強盗に遭い彼を残して一家が惨殺されてしまった為、ルルーシュ・ナナリーの母親であるマリアンヌが彼を憐れんで養子として引き取ったのであった。それ故、彼はその恩義に答えるべく会計士の資格を取り、義兄ルルーシュの右腕的存在となったのである。

「いいだろうロロ、報告してくれ」

「ありがとう兄さん、実は兄さんが会議に出ている間に兄さんに会いたいって電話があったんだ」

「ほう、この俺に？相手は誰だ？」

「ライラ・ミラ・ライラっていう人、ほら日本連邦党の」

「ああ、あの女性か。で用件は？」

「あの人、所属している連邦党の汚職に嫌気が差しているそうなんだ、その上一部の人達がティターンズに寄る事に危惧しているからこの二つの事で話し合いたいと言ってきているんだ」

「分かった、後で彼女とコンタクトをとろう。会合の場所はお前に任せる」

「分かったよ兄さん、その費用なんだけど…」

「勿論俺のポケットマネーから出す。言うまでもないがその費用も公開しておいてくれ」

「分かったよ、じゃ早速いい場所を探すね」

とロロが出て行くと

「では俺達もこのぐらいにするか。みんな、散開してくれ」

と言って散開させて会議室を出た。

「待て、ルルーシュ」

ルルーシュは会議室の出入り口で兄に呼び止められる。

「兄上、そういえば貴方の用件を聞いてませんでしたな」

彼は思い出したように言う。

「いや何、様子を見に來ただけだ。私の予想通りとなったな」

「ほう、手を組む相手がですか？」

「まあね」

シュナイゼルは日本連合国の下院議員である。因みに日本連合国議会はアメリカと同じく上院・下院の二院制となっている。

「ところで、お前はまだあの事を許す気になれないかね？」

とシュナイゼルが話題を変える、途端にルルーシュの目つきが陰しくなった。

「ふう、どうやらまだのようだね」

「兄上、その話は一切しないで欲しいと言ったはずですが」

ルルーシュの言う話とは彼の母校でもあるアッシュフォード学園で起きたテロ事件の事である。その日は学園祭が行われ、彼やシュナイゼル・ナナリー達の父親であるシャルル・ド・ブリタニアが招かれていた。が、彼を狙ってテロリストが自爆テロを起こし、シャルルを庇うようにしてランペルージ兄妹の母マリアンヌ、シャルルの兄であるV、そしてルルーシュのボディーガードを務めていたジェレミア・ゴッドバルドが命を落としたのである。その時のシャルルの態度が余りにも落ち着き払っていて何事もなかったように振舞った為にルルーシュは父親が母親を捨て駒として見殺しにしたと思い込み、両者の関係はギクシャクし今に至っているのだ。シュナイゼルはそんな二人の縊りを戻そうと間に入ってとりもっているのだ。

「まあいい、だがこれだけは言うておくよ。あの時の事がどうであれ、あの人はお前の父親なんだ。それだけは確かな事だからね、では失礼するよ」

とシュナイゼルは去っていった、だがルルーシュは目を陰しくしたまま吐き捨てるように言った。

「あの男が俺の父親だと!? ふざけるな!! 母上を見殺しにしたような奴を誰が父親と認めるものか!!」

その彼をシャーリーは心配そうな顔をして見つめていた。

「ルル…」

同じ頃、川越にあるバー『桜都』…。

「どうやら兄上は壬生国の選挙で喪黒を勝たせようとして外交に力を注ぐつもりだ」

「ああ、だがどう見ても内政干渉だな。このままでは壬生国がいや日本連合国が以前と同様にアメリカべったりの国になってしまう…」

この店のカウンターでジオン党のガルマ・ザビとシャア・アズナブル、それに日本連邦党ロンド・ベル派のアムロ・レイと小林勇人の四人が酒を飲みながら関東連合の行く末について話合っていた。彼らは所属政党は違えどもギレンのやり方に対する疑念やそれぞれの政治理念が似ていた為、時々このバーに来て政治論議に花を咲かせている。無論、その事を小狼とさくらは知っている。

「わが師、松坂征四郎は常々言っていた。『権力というもののほど恐ろしいものはない、若い頃の信念と理念は権力を持てば持つほど腐っていく』と。今のギレンはまさにそれだな、ガルマ」

「ああ、だが兄上はあの性格だ。昨夜防衛大臣のデラーズが婉曲に諫めようとしたが聞く耳を持たなかった」

「それは俺も聞いた『アメリカを手玉に取ってみせる』と豪語したそうじゃないか」

「そのとおりだ、アムロ。だが彼もアメリカの凄さが分かっていないと言っていた、私も同じだ。むしろ兄上は手玉に取られていると思う」

「それはそれとしてアムロ、俺達連邦党の事はどうする?今、俺達ロンド・ベル派とイーサン・ライヤーを中心とする親ティターンズ派が今後の方針の事で争ってるじゃないか」

と四人の中で今まで黙っていた勇人が言い出す。

「そうだな、勇人。だがティターンズは…」

とアムロが言いかけた時、彼の携帯が鳴る。

「俺だ、え?それは本当か?そうか、彼らから…。それだけじゃない?どういう…、なるほど…」

「アムロ、一体どういう電話だ?」

とシャアが携帯で話し終えたアムロに尋ねると

「チェーンからだがどうやら俺達ロンド・ベル派にギアス連合会が手を組みたいと話を持ちかけようとしているそうだ。それだけじゃないぞ、シャア、ガルマ、お前達二人にも俺の派閥を通じて接触したいそうだ」

『チェーン』とはアムロの秘書、チェーン・アギの事である。

「そうか、あの政党は党員の大部分が移民だ。ティターンズが政権を取ったら真っ先に排除される可能性があるからな、危機感を感じて接触を求めてきたようだな」

「ああ、もしかするとティターンズに関するあの黒い噂も彼らが接触を求めた理由かもしれない。勇人、本部へ戻ってブライト達とギアス連合会との会合の段取りを決めよう」

「そうだな、急ごう。マスター、お勘定」

とアムロ・勇人の二人は勘定を済ませて店を出て行った。

「どうやら、俺達も動く必要がありそうだな」

とガルマが言い出した時、今度はシャアの携帯が鳴った。

「俺だ、ナナイか…。ああ、その事ならばさっきアムロから聞いた。うむ、その事についてガルマと打ち合わせをしようと思っていたところだ…。分かった、すぐにそっちに戻る」

「忙しくなってきましたね」

と今まで四人のやり取りを黙って聞いていた小狼がシャアに話しかける。

「ああ、やはり壬生国の選挙でこの関東連合も大きく動く。だがギレンがやろうとしているのは時代の逆行だ、それを俺達が止めねばならん」

「大げさな事を言うようですがまさかこの国が壬生国に攻め入って事はないでしょうね?」

と小狼は不安な面持ちで言う

「その可能性は無いとは言えん、だが軍は反対するだろうな。聞いていただろうがまずデラーズがギレンのやり方に疑問を持っている。それに…」

とシャアが続きを言おうとしたのを

「それに軍にはドズル兄さんがいる、兄さんも壬生国に攻め入るという事になれば極力反対するはずだ、現に軍人の何人かが壬生国に移ってるんだそうだ」

とガルマがその続きを拾って言う。

「そうですか、それならいいんですけど…」

「いずれにせよ、俺達も事務所に戻って今後の方針を決めよう、ガルマ」

「ああ、キシリア姉さんにも来てもらおう。出来ればイセリナにもだ」

ガルマの姉であるキシリアは弁護士をしている。一方のイセリナはガルマの婚約者であり、ガルマとは彼が『君と一緒にいられるならザビ家を捨ててもいい』と言うほどの恋仲である。ガルマとシャアが出て行った後、さくらが不安な面持ちで小狼に言った。

「ねえ、一体この国はどうなっていくのかしら?お父さんの所もお兄ちゃんの所も黒い手が伸びているし…」

「大丈夫だよ、さくら。それを防ぐ為にみんな頑張っているんだ、拳志郎さん達もシャアさん達も」

更に翌日…。

「何!?連合会が我が党との連合を蹴っただ!?」

ティターンズ党首、ジャミトフ・ハイマンは幹事長であるジャマイカン・ダニガンから報告を聞いて顔を顰めた。

「フン!若僧共めが。政治は力で決まるという事が分かっておらんようだな」

「全くです、我が党にはジオンの連中に対抗できる人員と資金が豊富です。一体何を考えているんでしょうか?」  
すると

「所詮は移民です、我が国日本の事など何にも考えてはいないんですよ。蚕食する事がそもそもの目的なんですから」

と声高に言った男がいる。

「三輪か…。相変わらず移民には厳しい発言だな」

「当然です!あの民自党の馬鹿共が移民政策を行った為に我が関東連合いや日本連合国は何もかもが狂ってしまっているんです。今こそ移民共に甘い顔をしてはならんのです」

この三輪防人という男、まさにナショナリズムを絵に描いた男であり移民に対しては嫌悪的な態度を取っている。彼はあの西田啓の元で国学を学んでいた事があったが余りにも排他的な言動を声高に言っていた為に『君は日本を滅ぼすつもりか』と西田から破門されたのだった。因みに彼は現ゼーラ帝国である山陰地方の出身で日本が連合国となり出身地がゼーラになるを見て憤慨して飛び出し、関東連合に来て議員となったのだ。

「おいおい三輪、この私とて移民だぞ。それを忘れてもらっては困る。だが無秩序に入れすぎているな、我が国は」

「その通りです、党首。移民の為の政策は打ち切るべきです、あまつさえジオン党はアメリカ寄りの外交で推し進めようとしている。昔、日本各地に軍隊を置かされ、大事な国民の税金の一部を『思いやり予算』などと称して米軍から負担させられた事実を知らないのです、あの連中は!!」

三輪の言動は更に熱を帯びる。

「分かった、分かった、そう興奮するな。君の愛国心は十分すぎるほどよく分かった。とにかくアメリカ寄りの外交はやめるべきだという事は我々の中で一致している。当面はそこを中心にあの連中に対抗し政権を奪うのが先決ではないかね」

ジャミトフは三輪の言動にいささか辟易しながら言う。

「失礼いたしました、その通りです」

「ウム、あの若僧共が連合を拒否した以上他の政党に協力させる必要が出てきた。ジャマイカン、連邦党の例の奴等に資金を渡せ。奴等を使って何としてでも我が党に一人でも多く取り込ませるのだ」

「分かりました、早速」

「党首、その役目を私にもやらせて下さい。お願いします!」

と三輪が身を乗り出してジャミトフに頼む。

「ウム、いいだろう。お前は押し出しにはちょうどいい、ジャマイカンと話し合って行動せよ」

「ありがとうございます!早速行ってまいります!」

と三輪は部屋を出た。

「やれやれ、奴の愛国心の強さには困ったものだ」

「ですが党首、奴は我々にとってかなり優秀な手駒です。まあ尤も我等が政権を取れば奴はもうお払い箱ですがね」

二人が話しているところへ

「やあ、どうも。お邪魔でしたかな?」

と入ってきた男がいる。

「これはロンさん。珍しいですね」

そう、部屋に入ってきたのはあのマードック社長、マーク・ロンだった。喪黒とギレンの味方であるロンが何故ティターンズ党とも親しいのか?理由は簡単、万が一喪黒及びジオン政権が倒れた時の保険として彼らにも政治資金を渡しているからであった。

「先ほど三輪氏とすれ違いましたが、随分張り切っていましたね」

「あの男に連邦党員の買収させるようにしたんですよ」

「ほう、あの男も行動派ですね。しかしよろしいのですか?彼は移民排除思想に凝り固まっていると聞きますが」

「ロンさんご心配なく。あの男はいずれは捨て駒にする予定です、我々にとって危険極まりないですからな。しかし当面は奴を有効に活用するつもりです」

「そうですか、ならばいいのですが。そうそう、今日伺いしたのはあなた方にとって重大な情報をお教えするため

なんですよ」

「ほう、それは一体どんな事ですかな？」

とジャミツが尋ねると

「失礼ですがちょっとお耳を…」

とロンが彼に近づき、耳元で何かを小声で囁く。それを聞いたジャミツは顔を強張らせた。

「何!? 本当か、それは!？」

「ええ本当です、ですがご心配なく。私はあなた方の仇敵側にもつながりがあるのはご存知でしょう」

「ああ、そうでしたな」

「その仇敵が解決してくれますよ。何せ…。おっとここまでにしますか。『壁に耳あり』ですからね」

「そうだな、それにしても間抜けめ! もし我々が資金調達に別のルートを使っていれば笑い飛ばしてやったものを。だが奴等とは裏取引があるからな」

「そうでしたね、尤もそれを条件に私があなた方にも資金を提供していますがね」

「フン、恩を売ったつもりか!? まあいい、今はとにかくジオンの連中の打倒だ…」

一方三輪はというと…。

実は彼もまたジャミツを手駒にして移民を排除しようとしていた、彼もまたティターンズを利用しようとしていた。その証拠に彼は真直ぐに連邦党へ向かったわけではなく、意外な所に来ていた。

「やーれやれ、これで全て会計完了だ」

男が呆れ顔で女に言う。

「古泉、文句あるんだったらハルヒに言ってよ」

「いつまで数字ごまかしが効くと思ってるんだ。すでに GIN が動いてるって噂があるし」

「でも、この SOS 会はしたたかよ」

そう、ここは涼宮ハルヒの後援会事務所で、SOS 会は「世界を大いに愛国心で満たす涼宮ハルヒの会」の略なのだ。

長門有希と古泉一樹はハルヒの秘書だ。二人掛かりで二重会計を作り上げていた。

「で、うるさい先生がいるんだよね。この前のアプリコット事件でハルヒ先生が関与してるってホザいてる奴」

「あの玉城真一郎? 頭悪いじゃん。ヤマト正党の頑固で口の悪いおっさんね」

「油断ならねえよ。あいつ、あのゲンブの後継者じゃないか」

「アヴァロンのヴィレッタ・ヌウも始末が悪いわよ。あいつもかぎつけ回っているわ。そのうち献金の内容まで追及しかねないわよ」

「扇要も嫌な奴だ。まったく最悪じゃねえか」

と二人で話しあっているところへ

「やっているな、君達」

「三輪さん!」

そう、三輪が来たのはこの事務所だった。

「お久しぶりです! 今日はまた何の御用で?」

と古泉が席から立ち上がり、挨拶しながら三輪に近づいて尋ねる。

「いや、鈴宮君はいないのかね? 話があって来たのだが…」

「いや～申し訳ありません、ハルヒは今…」

「私がどうかしたの? 古泉」

三人がびっくりして後ろを振り向くとハルヒと二人の男が立っていた。

「ハルヒ!!」

「鈴宮君! それに豪和さんにキリングさん!」

そう、ハルヒは先ほど二人の男、豪和一清とあの防衛省直属の情報組織『サイクロプス』管轄者であるキリングと料亭『怪談亭』で密談をしていたのだった。因みに豪和は豪和インダストリイという重工企業の一族であり三輪と同じティターンズ党所属の政治家である。

「三輪さん、貴方が来てらっしゃるとは思わなかった」

と豪和。

「それは私も同じ事です、豪和さん。だが丁度いい、貴方にも話に加わっていただきましょう」

と三輪。

「ほう、豪和さんにも聞いてもらいたい事とは何ですかな?」

とキリング。

「実はティターンズの事で話がありましてね」

「へエ、どんな事なんですか？」  
と興味津々そうにハルヒが尋ねる。  
「ジャミトフは今、勢力拡大に乗り出してまして連邦党の党員を引き寄せてるんですよ。私はその役を買ってでましてね。行くついでに寄ったというわけです」  
「フム、連邦党をね…確かそこの親ティターンズ派代表は確か…イーサン・ライヤーでしたね」  
とキリングが顎に手をやりながら言う。  
「そうです、ですが単に買収したのではジオンがティターンズに代わるだけの事。そこでただ買収するのではなく、我々の壮大な計画の為に我々に引き寄せる形で買収しようと思っておりますので」  
「ああ、君がよく言う移民抑制政策か」  
「そうです、その為に一工夫いるのでお知恵をお借りしたいと思ひまして」  
「なら簡単じゃないの、豪和さんと一緒に工作すれば?そうすれば貴方が買収した連中は豪和さんの派閥の一員となるわけだし」  
とハルヒはあっさりと言う。  
「鈴宮君、君はジオン党所属だから分かっておらんようだが豪和さんはジャミトフから危険視されているんだよ。実際、豪和さんがジャミトフに取って代わるつもりだからね」  
「それはそうですけど…」  
「ならば元斗会を動かす事です。鈴宮君、君はサウザーさんとは親しいそうじゃないか。君とサウザー氏それに私が間に入って三輪さん及び豪和さんとライヤー派を取り持てばいいのではないのかね?」  
「さすがキリングさんね、そこまで思いつかなかったわ」  
「しかしキリングさん、ギレンが気づきませんか?」  
「その点はぬかりなく。あの男は壬生国の事で手一杯ですから」  
「よし鈴宮君、頼めるか?これでわが日本連合国に巣くう移民共をなんとか出来る!!」  
「お任せください!!三輪さん!!ほら長門、ポーっとしてないで電話貸して!!」  
「は、はいっただいま!!」  
  
「ほう、なるほどね。それで私と副議長が必要なのか…。いいだろう、是非協力させてもらおう」  
『ありがとうございます、サウザーさん!よろしく申し上げます、場所は後日ご連絡いたしますので』  
「分かった…。ウム、頑張りましたま。それでは」  
ハルヒから電話を受けたサウザーは受話器を置くと自分の部屋から外を眺める。  
眩しく綺麗な夕日が外に出ていた。その窓の傍らに一つの写真立てがあり一枚の写真が入れられてあった。彼はそれを手に取る、そこには幼き頃のサウザーと一人の男が写っていた。彼はその写真の中の人物に話しかける。  
「お師さん…。見ていてくれ。俺はいつか誰にも負けない力を手に入れてみせる…。もうお師さんみたいな悲劇に合う人を見るのはもうたくさんだから…」  
その顔は普段冷酷な顔と打って代わり、穏やかでやさしい顔だった…。

編集者あとがき:

我が盟友とのコラボレーションによる小説で、盟友はかなり苦労しています。  
利益一辺倒の考え方がどんな危険を招くかは今日のニュースでご存知だと思います。中国の哲学者の一人、老子は「私が恐れるのは『大道』からはずれていないかという事だ。『大道』は平坦なのに君主はわき道に行きたがる」と言ってますがそれが今回の話の事であるのは言うまでもありません。  
TPPにしてもそうです。結果はアメリカにしか利益が来ない歪んだ構造になり、日本中が激怒の渦に飲み込まれているのは明らかです。アメリカのモラルの低下はこの数年間凄まじいまで進み、それと同時に稼げば尊しという思い上がった価値観がまかり通る有様です。「我々は99%」運動はそうした歪みに待ったをかけたものであり、TPP 反対運動につながると日米間にいい影響を及ぼします。  
TPP の実態についてはメディア産業は隠しまくっており、信頼性にかけた報道ばかりがまかり通る有様です。いいかげんにして欲しいものです。メディア産業も政治の世界共々もはや権謀術数が蔓延っているわけです。我々の知らぬ場所で暗躍がまかり通り、政策論争がおざなりになるのが今の政治の実態であり、なにわの独裁者・橋下徹自称知事の暴走を招いているのはそうした闇の一部に過ぎません。  
また、国や民族のあり方についても我々は考えなおすべき時期に来ていると思います。

今回使った作品

『機動戦士ガンダム』シリーズ:(C)日本サンライズ・創通エージェンシー

1979・1986・1988・1989・1991・1996

『コードギアス 反逆のルルーシュ』:(C)日本サンライズ・コードギアス製作委員会 2006

『北斗の拳』:(C)原哲夫・武論尊 1983

『ガサラキ』:(C)日本サンライズ 1998

『闘将ダイモス』:(C)テレビ朝日・東映・東映エージェンシー 1978

『Get Ride! アムドライバー』:(C)スタジオディーン 2004

『涼宮ハルヒ』シリーズ:(C)谷川流・京都アニメーション 2003

『ツバサ クロニクル』:(C)CLAMP・NHK・ビートレイン 2003

『パタリロ!』:(C) 魔夜峰央・東映アニメーション 1978

『ロバート・ラングドン』シリーズ (C)ダン・ブラウン

『真・仮面ライダー 序章』 (C)東映 1992 年

ふたりはプリキュア Splash Star (C)ABC, ADK, 東映アニメーション 原作・東堂いづみ 2006- 2007

踊る!親分探偵 (C)東映、フジテレビ 原案:牛次郎「親分探偵ポパイ」

轟轟戦隊ボウケンジャー (C)テレビ朝日・東映・東映 AG 原作・八手三郎、脚本・會川昇 他、2006- 2007

『沈黙の艦隊』 (C)かわぐちかいじ・講談社

『きらりん☆レボリューション』:(C)中原杏・小学館 2004